

私のすすめるこの1冊

関口 久志 (教育支援センター 教授)

『援デリの少女たち』

鈴木 大介(著)

格差・貧困が広がる無縁社会に生きる少女たちの実態を、丁寧なルポによって目の前にさらけ出してくれる快作です。

「そんなこともわからないのか、だから先生は世間知らずなんだ」。私が京教大を出て高校教員になってからこの言葉を何回言われたか、今もまだ一般社会を「理解している」とは自信を持って言えない自分がいます。

実際に教育界は閉鎖的で、縛りもきつく息がつかまる思いをしたときも多くありました。そのようなときは保護者や一般の人たちと積極的に出会って、自分の認識がずれていないかを確認し、元気をもたらすことで乗り切りました。

しかし、どうしても接点を持ちにくい人たちがいます。学校に来られない子、行方がわからない子、その家族も含めこれらの人は、人間関係の接点を失い、孤立無縁化して社会の底辺層に沈み「サイレントプア」となってしまうがちです。

それを補ってくれるのが良質のルポルタージュ作家です。わずかな接点から存在を見つけ出し、何時間も何日もかけて取材を了解してもらう気の遠くなるような作業、そして時には犯罪すれすれの行為もいとわぬ大胆さ、どれもまねのできないことで頭が下がります。しかし、そのような作家は少数です。

その点で、この鈴木大介が暴き出す世界は貧困社会の若者の現在を知る上で限りない価値があります。「援デリ」とは「援助交際デリバリー」の略

で、出会い系サイトを利用した個人の援助交際にみせかけた少女売春の組織化です。当然、営業届けはなしで、そこには様々な危険が待ち構えています。しかし、条例により未成年では正式に風俗店にさえ雇用してもらえないため、どこにも居場所のない少女たちは、自分のからだだけが生きる術となって、この世界に入っていきしかありません。その過酷さが少女たちの振り絞るような告白から伝わります。

本には、性産業に入り誰の子かわからない妊娠をして、それでも覚悟をもって産み育てる女性の話や、孤立した知的・身体障害者も出てきます。そのどれもが生々しく底辺の少女たちの窮状を各種統計以上に鮮明に描き出してくれます。

できれば、同氏の『家のない少女たち』宝島社、『出会い系のシングルマザーたち』朝日新聞出版、『家のない少年たち』太田出版と併読してください。これらの少女・少年、そしてシングルマザーに共通するのも、やはり社会的孤立という「さびしさ」です。そしてそのどれもがそれを補うように貧しい性に関わっています。そこでは社会的に排除された弱者が、また弱者を食い物にする負の構造があります。

しかし、救いがたい状況からでも立ち直る人もいて、その手がかりはやはり「人間的なつながり」による信頼回復であることをわからせてくれます。それがどんな関係かは、読んでみての楽しみにしてください。

図書館からのお知らせ

講習会の案内

4月から開催中。6月も、まだまだあるよ！ぜひご参加ください！

図書館では今年度も、さまざまな講習会を開催しています。知って損はありません。
(時間など、詳しい情報はホームページやチラシをチェックしてね！)

区分	講習会名	内容	実施期間	レベル
論	EBSCOhost	海外論文を検索する	6月3～6日	★★★
論	ScienceDirect, Springer	海外論文を検索する	6月3～6日	★★★
集	文献管理編	集めた論文を管理する	6月3～6日	★★★

区分：「論」＝雑誌論文の検索 「集」＝資料管理

レベル：★＝初級 ★★★＝中級 ★★★★★＝上級 ただし、あくまで参考程度です。

必要な分野は専門により異なりますので、自分に必要と思うものを選んで受講してください。
迷う場合は、指導教員や図書館員にご相談ください。

企画展示・イベント案内

図書館 リクエストウィークが 終了しました。

5月14日(水)～5月27日(火)にかけて図書館リクエストウィークを実施し101件のリクエストをいただきました。たくさんのリクエストをありがとうございました。後日みなさんの書かれた推薦文とともに、図書館内に展示する予定です。次回は10月頃を予定しておりますので、ぜひ次の機会もご利用ください。

オーダーメイド講習会は 随時受付中です！

図書館活用法を覚えて効率よく資料を探しませんか？

オーダーメイド講習会なら、日時・場所・内容、すべて相談に応じます。すでに15名の先生方にお申し込みいただいております。学生さんのみのグループでも受付可能ですのでぜひご検討ください。

えほんのもり

今月の読み聞かせ会は、
6月16日(月) 15:00～です。

『あめぼぼぼ』

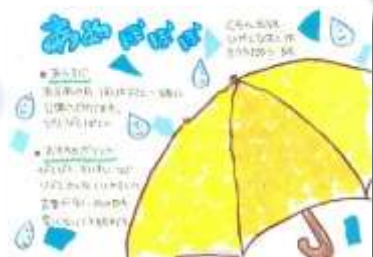
ひがし なおこ 作；きうち たつろう 絵

★おすすめポイント★

ぴとぴと、すいすいなどリズムカルなくりかえしの言葉が多く、雨の日も楽しくなってくる絵本です。

※絵本カードは幼児教育科の学生が作成しています。このほかにも毎月かわいいカードが飾られていますので、ぜひ児童書コーナーに見に来てください。

今月の
絵本カードは
こちら！



開催中！

第3回 写真展 小さな花と実

本学名誉教授 土倉亮一先生

好評につき、第3回を開催する事となりました！今も、「小さな花と実」に心を寄せて、採取・撮影を続けられている土倉先生の写真展です。この展覧会をきっかけに、気づかなかった世界の発見があるかもしれません。今回、土倉名誉教授の絵も展示しています。みなさん、ぜひご覧ください！

日時：平成26年5月27日(火)～6月30日(月)

※休館日を除く 9:00～17:00

場所：附属図書館北館1階 企画展示室



第22回 うたとおはなしの会

平井 恭子（幼児教育科 准教授）

4月26日(土)に第22回「うたとおはなしの会」が開催された。当日は朝から初夏を思わせるような陽気に恵まれ、親子連れを中心に122名の参加者で会場はいっぱいになった。

今回の特徴としては、季節感に加えて子どもたちにとって身近な「食」に関連するテーマを多く取り入れたことが挙げられる。例えば、最初の演目であるパネルシアター「おにぎりくんのたび」や手遊び「おべんとうばこ」では、演じる学生の歌や動作に合わせて、元気に歌ったり質問に答える子どもの姿が多く見られた。また、絵本「おなべおなべにえたかな」(作・絵：こいでやすこ)は、スープの番を頼まれたきつねの子が「おなべおなべにえたかな」と味見をするたびにスープがどんどん減っていくが、最後はたんぼぼ入りのおいしいスープが出来上がりみんなでお腹いっぱいいただくというストーリーである。物語の中で「おなべおなべ、にえたかな」「にえたかどうか、たべてみよう」というリズムカルな繰り返しを、学生の語りと一緒に子どもたちも楽しそうに唱える姿も見られ、子どもたちは物語の中で春の味と香りを満喫しているようだった。

楽器遊びコーナーでは、今回初めて「バス木琴の演奏」を取り入れた。これは、現在開催中の「音楽の教科書展」に合わせて、今回展示されているバス木琴の魅力を、演奏を通して子どもたちにダイレクトに伝えたいというねらいがあったためである。バス木琴の音は「おなべおなべにえたかな」の絵本の朗読の最中にもスープがにえる時の効果音として取り入れた。実際にこの楽器を初めて見た子どもたちも多く、楽器紹介に続いて演奏者が、「エンターテイナー」(スコット・ジョプリン作曲)を弾き始めると、子どもたちは心地よい木琴の音とマレットの動きに

興味津津の様子で演奏を楽しんでいた。続く「ドレミのうた」では、子どもたちも好きな楽器を鳴らして演奏に参加し、会場全体が一体となった。

そして最後のプログラムである人形劇は「赤ずきん」を上演した。赤いずきんをかぶった赤ずきんが歌をうたいながら登場すると、それを見守る子どもたちにも笑顔があふれた。そして物語の中盤、おおかみがおばあさんになりすまして、赤ずきんを食べる名シーンでは母親の手を握って心配そうな表情で見つめるなど、物語の世界にぐっと引き込まれている子どもの姿が印象的だった。

エンディングは、4月に幼児教育専攻に入学したばかりの1回生が登場し「ピクニック」を参加者と一緒に歌って会が終了した。子どもたちは終了後も、「赤ずきん」で登場した人形たちと握手をしたり一緒に記念撮影をしたり、お土産のちょうちょ(学生が手作りしたおもちゃ)を早速指につけ、ひらひらと動かして遊ぶなど、しばらくは楽しかった会の余韻にひたる様子が見られた。終了後のアンケートでは、「これまでいろいろなお話の会に参加してきたが、こんなに楽しい会は初めてだ。」「初めて参加したが、予想以上のクオリティーの高さに驚いている。3歳の娘も大喜びだった。」など、多くの保護者から好評をいただいた。

毎月開催している「えほんのもり」とともに、「うたとおはなしの会」が少しずつ地域になじみのある会として定着してきていることに大きな喜びを感じる。うたやおはなしを通して、親と子、あるいは学生と子どもたちの心と心が結ばれるような会の実現を目指し、更なる努力を重ねていきたい。



「名取洋之助の『LIFE』および日中戦争との関わり」

奈倉洋子

京都教育大学紀要. 2013, No.123, pp.141-156

国際社会ということばをよく耳にしますが、それを意識して日々を過ごしている人はどの位いるでしょう。教員を目指している皆さんにとっても、国際社会に生きる人間を育てるという意味で、それはとても重要なことだと思います。名取洋之助(1910 - 1962) は、日本における報道写真家のパイオニアで、彼の前半生は、国際社会との格闘が大きなテーマでした。18歳でドイツに渡った名取は、国際社会という大海の中で、日本や日本人ということをやでも意識させられました。日本がいまだに「フジヤマ、ゲイシャ」のイメージしか持たれていないことに彼は衝撃を受け、日本の真の姿を知らせる必要性を痛感し、それがその後の彼の大きな仕事になっていきます。世界最大の発行部数を誇った『Berliner Illustrierte Zeitung』に日本紹介の記事を掲載したのを皮切りに、帰国後は外国向けに日本の文化、社会状況を知らせる雑誌『NIPPON』を発行します。名取が残したもう一つの大きな仕事は、写真の組み方やレイアウト、説明文に徹底的にこだわり、文字に比べあいまいな記号である写真を読者にどのように伝えるかに心を砕いたことです。

この論文は、1937年4月から9月までのアメリカ滞在、それに続く日中戦争の取材の中で、『LIFE』誌に掲載された名取の写真と、前述した彼の二つの大きな仕事と関わらせて考察し、次の二点を中心に論じています。

(1)写真を撮った名取の意図と、『LIFE』編集部による説明文にズレがあるが、それはなぜ生じたのか。名取はその著『写真の読みかた』(岩波新書)に、説明文が写真の読み方を規定すると書いているが、彼が撮影した写真と、それに『LIFE』編集部が付けた文章をこの観点から検証する。(2)日中戦争に名取はどう関わったのか、また、陸軍報道部と結びつきを強め、日本の立場、行動について理解を求める対外宣伝誌を次々に作るなど、戦争に深入りしていったのはなぜなのか。

これは、日中の歴史認識の相違など、今日に続く問題でもあるので、彼の行動を今日的視点から検討する必要があるのではないかと思います。皆さんも、読んで、考えてみて下さい。

※本タイトルの論文は京都教育大学紀要 123号に掲載されています。

※京都教育大学リポジトリ「クエリ(KUERe)の森」<http://ir.kyokyo-u.ac.jp/dspace/> にも公開されています。

開館日程 □9:00-21:00 ■9:00-17:00 ■休館(CLOSED)

2014年6月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

6/1 創立記念日

2014年7月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	8	9	10	11	12	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

7/2 館内整理日

7/29-8/4 前期末試験

●京都教育大学附属図書館ホームページ

<http://lib1.kyokyo-u.ac.jp/>

●携帯版図書館ホームページ

<http://lib1.kyokyo-u.ac.jp/m/mhome.htm>

QRコード →



京教図書館 News No.165 (2014年6月号)

発行日:平成26年6月2日

編集発行:京都教育大学附属図書館

問い合わせ先:library@kyokyo-u.ac.jp